小野 あずさ

No Body 2

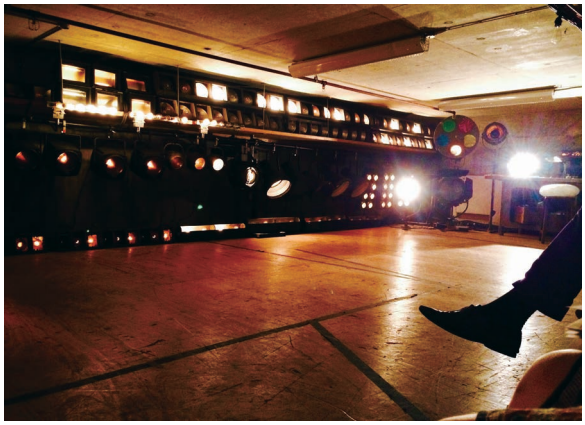
先月号で取り上げた、ロンドンのダンス劇場サドラーズウェルズにて行われた、「No Body」という照明だけを使ったインスタレーション/公演を、引き続きご紹介いたします。

前回とりあげたマイケル・ハルズ氏のライトショーは、メインステージで行われましたが、その次に待ち受けていたのは、バックステージツアーでした。ツアーと言いましても、ツアーガイドがいるわけではなく、床や壁に貼られたオレンジ色のドットを自分で追って行ってくださいというもので、自分のペースでバックステージを歩き見るものでした。楽屋では、暗闇にカツラがぎっしり敷き詰めてあったり(お化け屋敷?)、洗濯機の中だけが光って(LEDテープ) 回っていたり、遊び心が散りばめられていました。

調光音室では、無人なのに舞台監督のひたすらキューを呼ぶ声が聞こえ、音響、照明の両卓とも、そのキッカケに合わせてフェーダーが動いたり、Goされたりと、本番さながらの緊張感が伝わってきます。いつもその光景を目にしている自分にとっては、大きな驚きはありませんでしたが、このキューを聞きながら、セーフティーカーテンの閉まった舞台を見下ろしていると、そこでどんな舞台が繰り広げられているのか、想像を掻き立てられました。日本では、ここまでこまめに舞台監督がキュー出しをすることがないと思うので、お経のように途切れることのない、このキュー出しの嵐を聞くのは、日本人スタッフにとっては違和感があるかもしれません。

普段、テクニシャンや舞台裏スタッフが座っているはずの椅子には、白い大きな石が、薄っすら光りながらデーンと座っていました。無人なのに、そこに人の気配と活気、重さが感じられるようでした。新しい形で観客に、舞台裏を体験してもらおうという試みだそうです。

迷路のような劇場内を歩き回った後、最後にたどり着いたのが、地下の細い廊下の奥にある小さな倉庫部屋でした。入り口はとても狭く少し高いところにあり、ハシゴを何段か登らないと入れない所でした。その部屋は定員10人まで。中に入ると、コンクリートで密封された、ホコリ臭くほぼ真っ暗なお部屋。かすかに見えるのは、もう使われていないと思われる、古いタイプの灯体たちが200体程、フレネルやフットライト、見たこともない物まで種類はいろいろで、奥の棚にずらーっと並んで静かに眠っています。倉庫の隅のほうには、ほんのり灯のついたデスクランプが乗った机が一脚あり、半田ごてや、ドライバーなどの工具、ラジカセが置いてあり、そこからかすかにノリの良いラジオの音楽が流れています。まるで誰かが、1人で灯体のメンテナンスをしているようです。



“No Body - Hidden” in サドラーズウェルズ劇場の地下の照明倉庫

灯体の棚を前に、並べられた一列の椅子に観客は座らされ、少しすると、例の(目には見えない) メンテをしているテクニシャンが、一仕事終えたかのように、ラジオとデスクランプを消し、倉庫から去っていく音が聞こえます。シーンと静まり返った真っ暗な倉庫の中に取り残された私たち。随分長い間、暗闇にいた気がします。そして部屋の隅で、線香花火に一瞬火がついたように、ジリっと何かが燃えて、消えたみたいに見えました。それに反応して、近くの灯体もジリジリっと光って応えます。周りの灯体たちもゆっくり目が覚めたように、光りの呼吸を始めます。劇場の地下にずっと忘れ去られていた灯体たちは今、久しぶりに観客を目の前にし、何かソワソワ、でも興奮しているかのように、互いに会話をし始めます(これは私の想像ですが、この時点で実際に聞こえてくる音は、ゲージのかかった電球から聞こえてくるジーという音の強弱のみ)。

話は纏まった様子。「それではお楽しみください!」といった感じで、音楽と一緒に、光のオーケストラが始まりました。マイケル氏のライトショーとは全く違う印象でした。デリケートでなめらかなオーケストラを見ていて、心がとても温かくなりました。女性ならではの柔らかさと言いますか。この照明デザインを手がけたのは、ダンス照明業界で名高いルーシー・キャーター氏。タイトルは“Hidden(隠された)”。もう使われなくなってしまった灯体たちに、再びスポットを当て、息を吹き返させるという、古い灯体たちへの敬意と祝意を表しているように感じられました。

このNo bodyという公演を観に来て、舞台照明という枠から、新たな照明の可能性と領域が広がっているように思えました。ある意味、一つの芸術作品として成り立つものだと思います。街中のイルミネーションやライトショーも、これの一環に入るのかもしれません。でも、舞台照明家が作り上げる空間と時間の捉え方は独特であり、建築照明やイルミネーションとは違う、物語性とダイナミックさがあるように思えます。